

如水会寄附講義「社会実践論」講義要綱（2009年度夏学期）

講義責任者：山崎秀記

2009年4月14日（火）オリエンテーション

14時40分 西本館 21番教室

如水会寄附講義「社会実践論」では、産業界等、社会の第一線で活躍されている本学の12名の先輩の方々が、週1回ずつ（火曜4限）オムニバス方式による講義をされます。

皆さんが、将来の職業選択を軸に大学でこれから何を如何に学ぶかを考える指針となるように、現在第一線で活躍されている諸先輩に、「学生時代に何をしたか」、「社会に出てどういう転機があったか」等自らの体験を交えてお話しいただきます。講師の方々は、自分の歩んでこられた、そしていま歩んでおられるところから、社会を、日本を、あるいは世界を切り取って皆さんにわかりやすく提示し、皆さんが、現代社会とそこでの社会実践のあり方を個別具体的に考える機会を与えてくださることでしょう。

皆さんは、1回きりの講演をただ聞くというだけでなく、先輩の生き方や考え方にふれて触発されたものを質問や感想・意見として返し、ともに考え学ぶ場を作り出してください。

なお、本講義は、如水会および一橋大学の学問風土の活性化を目指して故永井正（22学）氏が寄附された基金をもとに運営されている一橋大学後援会「キャプテン・オブ・インダストリーを考える委員会」からの資金提供によって運営されています。

講義日程

第1回 4月21日（火）



テーマ：「一橋の精神と風土」

講師：大澤俊夫 東京商科大学・昭和27年卒
元NECリース（株）会長

講義内容

一橋大学は、明治8年（1875年）に、私塾商法講習所として、生まれてより134年の歴史を経て、今日の我が国屈指の社会科学の総合大学に発展するまでに至った。しかしその道程は平坦なものではなかった。数回にわたる学園存亡の危機があったが、その都度全学が一致して闘い、克服してきた。しかもその間、常に本学は、我が国の経済社会の近代化の先駆者として、学問と実践の両面にわたって有為な人材を輩出してきた。このような本学の活力を産み出してきたものは何であったのか、その「精神と風土」について語り、併せて、本学の建学の精神を体現する言葉「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の現代的意義について言及したい。

第2回 5月12日（火）



テーマ：「草莽崛起（そうもうくつき）～ 在野の志士たちよ、立ち上がれ」

講師：小島健一 社会学部・昭和62年卒
神奈川県議会議員

講義内容

大学卒業後、都銀4年、フリーター1年、外資系企業6年、老人介護5年、そして現在、政治家6年目。大学時代、極度の対人恐怖症だった私が政治家として駅前で演説している姿など、当時の同級生には想像できないかもしれませんが。私はこれまで様々な職業を経験し、多くの良い人悪い人に会い、窮地に立たされたことも数多くありましたが、しかし、それが全て今の自分の肥やしになっているとつくづく感じています。

草莽崛起とは、幕末の吉田松陰が唱えたものですが、「身分を問わず在野の志ある者たちが、新しい時代を築くために立ち上がること」を意味します。一橋の精神にもありますが、学生の皆さんに是非日本のリーダーとなってもらいたいという思いで私の経験談をお話したいと思います。

第3回 5月19日(火)



テーマ：「変化を恐れずチャレンジに挑もう ― 実力試すことで本当の力と自信に―」
講師：三ッ森隆司 経済学部・昭和58年卒
日本NCR株式会社 代表取締役社長兼CEO

講義内容

私は就職先を決めるに当たって、大学の同期の多くが有名な大企業を志望した中で、当時120人程度しか従業員がいなかった外資系コンサルタント会社を選びました。

自分にしかできないことにチャレンジしたい、新しいこと、面白そうなことを自分で開拓したいと、そんな気持ちでした。当然、チャレンジにはそれなりの実力がなくて、実力がなければ、一つの壁にぶつかったただですぐに壊れてしまうのですが、それでも若いうちは失敗を恐れずに繰り返しチャレンジすることが大切です。

チャレンジの大切さを、グローバル企業の中でのマネジメントの経験からお話したいと考えています。

第4回 5月26日(火)



テーマ：「大学生活とは？ ― 知識習得でなく、より良く自分が生きる基礎作りの場―」
講師：河口真理子 経済学部・昭和58年卒
経済学研究科・昭和61年卒
大和総研 経営戦略研究所主任研究員

講義内容

マスコミでは環境問題が連日報道されています。今の学生にとっては、環境問題は当たり前のことでしょう。しかし私の学生時代に環境問題に関心があるという、「変っている」といわれたものです。先日も学生時代の友人のブログに「ブチ変人」と書かれていました。環境問題の研究を志したのは学部学生の頃。大学院にすすみ環境経済の研究者になろうと思いましたが、ムリとあきらめ、証券会社に入社して20数年。やっと10年ほど前から環境を専門に仕事ができるようになりました。私が発信している環境問題についてのレクチャーと、環境問題との半生以上にわたる関わり方から生き方、大学や学問との付き合い方について、お話をさせていただきます。

第5回 6月2日(火)



テーマ：「企業とは何か～日本鉄鋼業の歴史の中で学んだこと～」
講師：進藤孝生 経済学部・昭和48年卒
新日本製鐵株式会社 副社長執行役員

講義内容

本学の学生の多くは卒業後日本の企業に就職していきます。しかし、「日本の企業」というものが、どんな集団・組織であるのか、よく分からない方も多いのではないのでしょうか。私も35年前、典型的な「日本の企業」に入社し、日本の「ものづくり」に関わってきました。世界経済の変動、日本経済の成熟・グローバル化、バブルの発生と崩壊等、厳しく激しい事業環境変化へ適応するため、日本の企業はこの35年間、事業の多角化、技術の開発、人員の合理化、合併・買収等、多大な努力を払ってきました。その過程の中で、常に突きつけられる問いが「企業とは何か」「自分の会社は何のために存在するのか」と言うことです。鉄鋼業での体験を通して得た私の考えをお話ししてみたい。

第6回 6月9日(火)



テーマ：「メディアで働く―記者の転機と天気とテンキーと」
講師：市村友一 社会学部・昭和57年卒
朝日新聞社 事業本部長補佐

講義内容

いざ就職という段になって、商才もなければ、「士」資格を取れる展望もないとなれば、留年覚悟のマスコミ狙いもむべなるかな。運よく朝日新聞に引っかかり、「デモンカ記者」とあいなったが、地方勤務を経て、東京、大阪、名古屋、ニューヨークと、ニュースを追いかける日々はなかなか刺激的だった。マイ神様ジミー・ペイジ(レッド・ツェッペリン)にインタビューできたのも僥倖のひとつである。その後、アエラ編集長時代に週刊誌づくりの醍醐味を知り、今の職場では展覧会やスポーツイベントの企画・運営に携わり・・・ということで、メディアで働くことの楽しさと厳しさについて、少しはお話できるかなと思う。意味不明であろう講義テーマの謎解きに乞うご期待(これから考える)。

第7回 6月16日(火)



テーマ：「世界の中の日本，社会の中の自分」

講師：海部 篤 法学部・昭和63年卒
外務省 欧州局 中・東欧課長

講義内容

大学に入学する時，社会に出る時，全くの新天地に降り立つ時・・・多様な価値観や果てしなく続く地平線を前に，あなたは何かを感じますか？ 世界の広さ？ 己の存在の矮小さ？ 尻込みを恥じるキザなハート？ どこまででも行ってやろうという武者ぶるい？

国の政治や行政に比較的近い環境で育ったことと，偶々少年時代に海外経験をさせていただいたことから，世の中と幅広く係わり合いをもちたい，「私」よりも「公」の為に働きたい，と考え，外交官を志望しました。まだまだ道半ばですが，広がりや奥行きが尽きない，無尽蔵の面白さを堪能する日々です。一橋での4年間を含め，ささやかな体験談から，今後のための何がしかのヒントを得ていただければと思っています。

第8回 6月23日(火)



テーマ：「人間力とコングロマリット」

講師：江川哲子 法学部・平成10年卒

三菱商事株式会社 天然ガス事業第一本部 マレーシア事業ユニット
事業投資チーム マネージャー

講義内容

学窓で学んだ事の多くが様々な社会学理論であったのに対し，業務を通じて遭遇し類稀と感じられる経験の多くは論理や合理的精神では対処できない状況だったと振り返ります。新技術を認めない価値観や極端に保守的な考え方に出会う時，私が身を置く日本商社が国益に与する利益主義で立ち向かう事は出来ません。そうした場合に何をもって我々の仕事を押し進めてゆくか，人は何によって動くのか，そんなことをじっくりと考えるようになりました。この考える力はIQではなくEQと呼ぶもの，上司の言葉を借りると「人間力」というそうです。

社会に出るにあたり株式会社という組織でもありコングロマリットと呼ばれる企業グループに在る会社を選び今も身を置く者として，組織とは何か，組織が変革を遂げるとはどういう事なのかについて，私が人間力を磨く事の意味から話をさせてもらいたいと思います。

第9回 6月30日(火)



テーマ：「転職は展職 世の中の変化がきっかけになった」

講師：藤井 哲 経済学部・平成4年卒

ダノンジャパン株式会社マーケティング部
マネージャー ヘルスアフェアーズ&PR

講義内容

1992年3月の卒業後，私がまず選んだのはIT(電機)業界でした。日本メーカーは80年代に大きな海外進出を果たし，その技術力を持って未来を切拓していこうという気概に満ち溢れていました。

縁あって，次に進んだのがヘルスケア(医薬品)業界でした。折しも医療制度改革の声が高まる中，マネジドケアと呼ばれるコスト抑制型のモデル導入に携わりましたが，現実に変化を起こすには至らず，事業は中断されます。代わって任されたのが，薬局で売っているかぜ薬などのマーケティング業務で，ここでブランドマネジメントを修得し，また，2002年以降は社会的な禁煙キャンペーンにも参画しました。

一昨年からは食品業界に移り，新たな視点から医療・健康に関わる仕事をしています。現在興味があるのは健康・栄養情報のデザインと，その一部としてのプロバイオティクスです。

皆さんは自分の健康について，何を知っていますか？ 家族や友人の健康についてどんなアドバイスができますか？ 日本にとって，世界にとって健康とは何なのでしょう？

第10回 7月7日(火)



テーマ：「20代で起業する」

講師：荒井邦彦 商学部・平成6年卒

株式会社ストライク 代表取締役

講義内容

私は、公認会計士試験に合格後、大手監査法人に就職しました。しかし、私の場合、会計士を目指したのは監査法人に勤め続けるためではなく、会社を興す準備のためでした。とにかく人と違うことがしたかったのです。「先生」と呼ばれる仕事から「社長」と呼ばれる仕事がしたくてM&Aの助言会社を興しました。

起業にはリスクが伴うと言われていますが、私はそうは思いません。就職して同じ会社にとどまり続けることも、私には起業と同じ程度のリスクを負っているように見えるのです。また、「理念のない企業は滅びる」という人もありますが、必ずしもそうではないと思います。

起業はもっと気軽なものであってもいいと思うのです。

講義では私の経験から学生の皆さんに起業の楽しさと苦労話をお伝えしたいと思います。

第11回 7月14日(火)



テーマ：「企業倫理とリーダーシップ」

講師：後藤栄一郎 商学部・平成11年卒

後藤木材株式会社 取締役生産・開発本部長

講義内容

企業の法的コンプライアンスが重要視される中、景気の悪化は着実に中小企業の経営体力を奪っています。こうした中で、経営者として頼るものは手法だけでなく、経営者自身の姿勢が作りあげていく倫理基準とその組織への浸透が大切になります。授業では、ケーススタディーを行い、経営者や現場が陥り易い「倫理ジレンマ」を実際に感じて頂きます。そして、経営陣と現場の倫理意識のずれはなぜ生じるのか。経営陣の倫理基準をどう現場にどう伝え、日常の業務に如何に落とし込むか。そして最後に、「倫理・商道德を守るというのは、ビジネスと一体の話である」ということ。「魚は頭から泳ぐ」と言いますが、倫理基準を組織に埋め込むには、まずトップ層が猛反省し、行動と言動を自ら変えていく「率先垂範」以外に絶対に方法がないことを理解してもらえれば良いです。リーダーになる為の、1つの糧として頂ければ幸いです。

第12回 7月21日(火)



テーマ：「法曹として生きる」

講師：谷口園恵 法学部・昭和61年卒

京都地方裁判所 判事

講義内容

裁判官の仕事といえば、法服をまとして法廷に臨み、机上で判決起案に取り組むというイメージでしょうか。もちろん、それが不変の本分ではありますが、「事前規制から事後規制へ」という流れの中で、法曹の仕事の裾野は広がっており、裁判官もそれと無縁ではありません。私自身も、平成元年の任官以来、民事裁判の現場での仕事に加えて、裁判実務を支援する事務方の仕事や、法務省に出向しての民法改正作業など、様々な仕事に関わってきました。私の学生時代と比べると、法曹の活動領域は、「動いている」、「増えている」、「広がっている」という点で大きく変遷しています。

その変遷の過程を、仕事の傍ら、留学、結婚、出産、育児もしながら20年駆けてきて学んだこと、そして、改めて考える法曹として何ができるのか、何をするのかということをお話ししてみたいと思います。